

第 IV 部門

雨庭のデザインボキャブラリー構築に向けた古典短歌の構造分析

神戸市立工業高等専門学校専攻科 都市工学専攻 学生員 ○臼田 妃那
神戸市立工業高等専門学校 都市工学科 正会員 高田 知紀

1. 本研究の目的と背景

本研究の目的は、日本の古典短歌に詠まれた雨の風景描写を分析することで、日本の風土性に根ざした雨庭デザインの基礎となる要素を抽出することである。

日本の雨の降り方の特徴として、季節ごとの変動が激しく、梅雨期と台風期に集中していることが挙げられる。また、都市部特有のヒートアイランド現象や都市型水害の原因となる局所的集中豪雨が地球規模で年々深刻化している。それらの問題の対策として、兵庫県では、平成 24 年より「総合治水条例」を施行し、県内全域で取り組みを進めている。総合治水の取り組みでは、雨水タンクやため池貯留などの取り組みに加えて、欧米を中心に整備が進んできた雨庭(rain garden)が注目されている。雨庭は、アスファルトや屋根などの不透水性舗装に降った雨を集め、一時的に貯留し、浸透させるための植栽空間と定義でき、多様な機能と効果が期待できる¹⁾。

雨庭は単なる雨水貯留施設ではなく庭・緑地空間であることから、日本の風土性に根ざしたデザインを考えなければならない。そのために重要なのは、欧米を中心に普及してきた雨庭について、日本の四季の変化や植生、歴史文化に通じたデザインの理念や技法、すなわちデザインボキャブラリーを構築することである。

2. 研究の方法

本研究では、日本における雨と人間とのかかわりについて考察するうえで、伝統的な和歌集に着目する。小林亨は、「芸術表現の分析は、景観研究の一手法として有効である」と述べている²⁾。研究の対象は、八代集である。八代集とは、勅撰和歌集のうち、「古今和歌集」、「後撰和歌集」、「拾遺和歌集」、「後拾遺和歌集」、「金葉和歌集」、「詞花和歌集」、「千載和歌集」、「新古今和歌集」の 8 集のことを指す。

方法としては、八代集より雨について詠まれた和歌や、あるものを雨に例えて詠まれた和歌を抽出し、現代的な文章構成にするために、抽出した短歌の要約を行う。要約した和歌から、まず雨の風景のなかの主体(身体)の位置関係についてモデル化を行う。次にテキストマイニングソフト「KH Coder」を利用して形態素解析を行う。形態素解析は、自然言語で書かれた文を言語上の最小単位である形態素(語)に分割し、それぞれの品詞や変化などを割り出す方法である。形態素解析を行った和歌について、それぞれの語を要素ごとに分類する。さらに、要素の分類をもとに雨と人の空間的関係と情緒的関係を明らかにする。これらの成果をもとに、古典短歌に詠まれた雨の風景描写を構造的に把握する。

3. 雨に関する和歌の抽出および「雨-身体」関係のモデル化

雨に関する和歌を抽出した結果、全 330 首であった(表 1)。抽出した和歌について、まず雨のなかの人間(主体)が、雨とどのような位置関係にあるかについて類型化した。その結果、主体が雨の中にいる場合(「雨-内-身体」モデル)、主体が雨を建物などから眺めている場合(「雨-眺め」モデル)、実際に雨は降っていないが雨を想像している場合(「雨-想起」モデル)の 3 つのモデルにわけることができた(図 1)。これらの 3 つのモデルのうち、「雨-内-身体」が 24 首、「雨-眺め」モデルが 193 首、

表 1 各歌集における雨の歌の数

和歌集	総首数	雨に関する和歌数	割合(%)
古今和歌集	1111	28	2.5
後撰和歌集	1425	52	3.6
拾遺和歌集	1351	38	2.8
後拾遺和歌集	1218	37	3.0
金葉和歌集	717	25	3.5
詞花和歌集	415	18	4.3
千載和歌集	1288	44	3.4
新古今和歌集	1978	88	4.4
総数	9503	330	3.5

「雨-想起」モデルが 113 首という結果であった。

4. 雨の和歌の形態素解析

各歌集の解説を参照しながら、抽出した雨の短歌を現代文に要約した。さらに、要約した文章に対し、テキストマイニングソフト「KH Coder」を用いて形態素解析を行った。たとえば、古今和歌集のなかで大伴黒主が詠んだ「春雨のふるは涙かさくら花ちるをおしまぬ人しなければ」については、要約は「春雨の降るのは涙なのか、桜の花が散るのを惜しまない人は、誰一人としていないのだから」となる。この短歌についての形態素解析の結果は図 2 のようになる。

抽出した雨の和歌すべてにおいて同様の作業を行い、各和歌を最小限の語単位まで分け、要素ごとに分類した。要素は、主体要素(行為、五感、感情)、対象要素(雨の種類、植物、動物、人工物、地形、天体・自然現象)、時間要素(季節、時間帯、環境変化)の 3 要素 13 項目である。

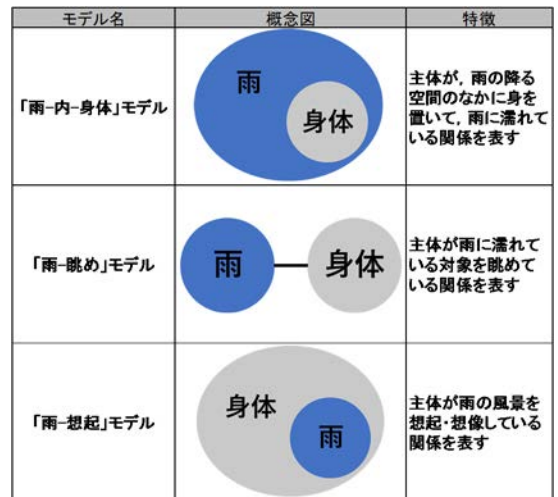


図 1 「雨 - 身体」関係モデル

春雨の降るのは涙なのか、桜の花が散るのを惜しまない人は、誰一人としていないのだから

図 2 形態素解析の例

5. 和歌における雨の風景描写の構造分析

形態素解析とその要素分類の結果をもとに、雨の風景描写の構造分析を行った。その際に、和歌のなかで描かれた雨の降る物理的環境については「空間的關係」、雨の風景のなかにいる、あるいは雨を想起している人間がどのような心情となっているかについては「情緒的關係」として分析を行った。

5. 1 空間的關係の分析

雨の風景描写における「地形」項目の分析より、水に関係する川・池・江・湖・沼・水たまり・沢や、季節に景観が変化する山・森などが大半を占めていた。このことから、昔の人々は、水の増水や流れ、色の移り変わりなど、景観が変化することに趣を感じていたことがわかる。「植物」項目では、紅葉について詠まれた歌が多い。紅葉を楽しむ完成は現代人にも通じていることであるが、雨に濡れる紅葉を愛でるという視点は、雨庭の空間デザインにおいて重要な示唆をもたらす。つまり、雨が降るからこそ見ることができる景観であり、雨を肯定的に捉える視点だと言える。

5. 2 情緒的關係の分析

情緒的關係の分析では、特に「泣く」という行為について、涙を雨に例えたり、雨が降っている中で涙を流したりする歌が詠まれている。恋に関する歌や、故人に向けた涙、花が散ることを惜しむ涙など様々であるが、どの歌も悲しみやつらさといった感情が雨の風景に投影されている。花が散ることを惜しむ歌では、涙によってその花がとても美しいことを強調する役割を果たしている。このような歌では、雨に例えた涙が、ネガティブなイメージではなく、むしろポジティブに用いられている。また、「雨に濡れたい」という感情、雨具の言葉あそび、雨による増水などを詠んだ歌では、雨の風景のなかにより積極的に意味を見出す姿勢が読み取れる。特に「雨-内-身体」モデルのなかでは、「ぬるるさへうれしかりけり春雨にいます藤のしずくとおもえば」のように雨そのものを楽しむ様子が描かれている。これらの結果は、雨を空間構成の重要な要素とする雨庭のデザインにおいて重要な意味をもつと考えられる。

参考文献：

- 1) Nigel Dunnett, Andy Clayden : RAIN GARDENS Managing Water Sustainably in the Garden and Designed Landscape, Timber Prss, pp.9-171, 2007.4.
- 2) 小林亨：移ろいの風景論—五感・ことば・天気、鹿島出版会、2003.